

唐・陸龜蒙の『耒耜經』と曲轅犁の成立

渡 部 武

一 はじめに

二 『耒耜經』校釋

(一) 校釋に用いた底本・各種テキスト・注釋論文一覽

(二) 『耒耜經』校訂文

(三) 『耒耜經』全譯

三 魏晉から唐代にかけての犁耕圖の檢討

四 曲轅犁の成立について

五 ち づ び

一 は じ め に

さきに私は「中國古代犁耕圖再考——漢代畫像に見える二つのタイプの犁をめぐって——」(『古代文化』第四〇卷第一一號、一九八八年。以下これを「前稿」と略稱)なる論文を發表し、出土資料の方面から漢代の犁の形態とその機能とを分析した。その結果、以下のことが明らかになった。(一)漢代の犁は基本的には枠型犁が主流を占め、それは大きく區分すると、犁床と犁梢とが別木からなる長床タイプの方型犁と兩者が一體となった無床もしくは短床タイプの犁があった。(二)犁の繫駕方式については、一般的に二牛擡横方式と一牛で曳く搖動犁方式も普及し、また軛(頸木)および引木の犁槃と

思しき繫駕具も採用されていた。(三) 轅は短轅と長轅の兩様があり、いずれも直轅が主流で、おそらく曲轅はまだ出現していなかった。(四) 鐵製犁鏵と犁冠には、土壤の性質や作業の内容に應じて各種の規格があった。(五) 犁鏵は、土壤を片側に反轉させるタイプのものと兩側に反轉させるタイプのものがあった。(六) 犁先の入土角度を變え、耕土の深淺を調節するための犁評(簡單な楔狀のもの)が考案されていた。

周知のように中國の牛犁耕は、戰國時代以降の製鐵技術の發達と戰國諸侯の耕地擴張政策と相俟つて著しい發達を見る。そして中國古代犁の基本的な構造と特色は、漢代あたりに、かなり高い水準に達していたと考えられる。しかし、中國耕犁發達史上とくに注目しなければならないのは「曲轅犁」の出現である。この曲轅犁は現代の中國各地の農村地帯で廣く用いられている犁の直接的な源流をなし、水田地帯および畑作地帯のいずれにもよく普及しており、一頭の牛に輓引させ、撥土と回轉がまことに效率がよいため、農民の間で非常に重寶がられている。曲轅犁についての記録は、唐代の陸龜蒙が著した『耒耜經』に初めて見られるが、この犁が一體いつ、どこで、どのような事情の下に誕生したかは多くの謎に包まれている。そこで以下、陸龜蒙の『耒耜經』のテキストを正確に讀み解いて唐代の曲轅犁の構造を把握し、ついで魏晉から唐代にかけての農耕壁畫や犁耕模型等の出土資料を検討して、曲轅犁の出現事情を考察してみることにする。

二 『耒耜經』校釋

『耒耜經』の著者陸龜蒙は、九世紀後半に活躍した文人であり、莊園地主である。その傳記は『新唐書』卷一九六隱逸列傳に立てられた本傳、宋・孫光憲撰『北夢瑣言』卷六、宋・樊榘撰『甫里陸先生文集序』(『笠澤叢書』所收)、および陶淵明の「五柳先生傳」に倣つて陸龜蒙自らが著した「甫里先生傳」(同)などに記されているが、いずれも著者の一生を跡づけるには不充分である。近年、陸龜蒙の傳記の不明部分および彼の莊園經營の實態について、陸氏の詩文集『笠澤叢書』ならびに陸氏と皮日休の間での倡和集『松陵集』等を素材にして、北田英人氏が精緻な論考を發表し、この方面の研

究に大いに進捗が見られるようになった。⁽¹⁾いま北田氏の研究等を踏まえて陸龜蒙の略傳を記すと、以下の通りである。

陸龜蒙は、字を魯望、號を天隨子・甫里先生（松江のほとりの甫里に居住したことに因む。宋・朱長文撰『吳郡圖經續記』巻下に甫里の彼の舊居址の記事が有る）・江湖散人と稱し、その本貫は蘇州と目されている。生卒年は不詳であるが、北田氏は歿年を僖宗の廣明元年（八八〇）前後と推定、五代・王定保撰の『唐摭言』巻一〇に「中和の初め（元年が西曆八八一年）、疾に逼^あいて終る」とあるから、ほぼその頃であろう。『新唐書』本傳によると、陸龜蒙は一時進士の受験資格を獲得したが、中央禮部試に失敗、その後、郷里の蘇州に戻り、當地に赴任してきた州從事の皮日休と昵懇の閑柄となり、倡和集『松陵集』に見られるような友情溢れた生活を送る。しかしながら、老いたる親の扶養などの經濟的な理由から刺史張搏の幕僚となり、蘇州や湖州をはじめとして幾つかの地方を歴遊する。そして晩年は郷里に隱棲し生涯を終るのである。陸龜蒙の田宅の規模は「甫里先生傳」に「先生の居、地數畝有り、屋三十楹有り、田十萬步（注に「吳田の一畝は二百五十歩に當る」とあるから四百畝）を奇^{あま}す有り、牛四十蹄（一〇頭）を減ぜず、耕夫百餘指（二〇人餘）有り」と記されている。北田氏の分析によると、陸龜蒙の莊園の中心は蘇州城内の臨頓に所在し、別業は蘇州と湖州にそれぞれ二箇所の合計四莊所有していたとのである。

次に『耒耜經』について解説しておこう。陸龜蒙が『耒耜經』を著した動機はきわめて明らかである。彼の詩文集に收められた作品の題名を通覧すると、彼自身農事をはじめとした各種の生業や生態環境に並外れた興味を抱いていたことが分る。例えば「漁具詩」に列記された漁具の名稱とその使用法は、蘇州の水郷地帯の民族誌としても貴重であり（餘談ながら附記しておく、詩中の「罩」の記事は魚伏籠の具體的使用法を示したものとして最も古い）、今様の表現を借用するならば、陸龜蒙は卓越したフィールドワーカーであると稱しても過言ではない。當然の事ながら、彼の興味は農具にも向けられた。『耒耜經』の前文に「余、田野の閒に在りて、一日畊甿を呼びて、就きて數しば其れ目するに、恍として農皇の庭に登れるが若し。……孔子の「吾れ老農に如かず」と謂うは信なり。因りて書して耒耜經を爲る」とあり、陸龜蒙は自己の莊園

内で働く農民から直接に犁をはじめとした各種の農具の構造と操作法を尋ねて、この『耒耜經』を著したのである。

ところで王毓瑚および天野元之助兩氏が指摘しているように、『耒耜經』は元來『笠澤叢書』や『甫里先生文集』に收められていたために、唐・宋時代の公私の書目に見られず、たぶん宋末頃より單獨に流布するようになったものと思われる。⁽²⁾『耒耜經』の本文はわずか六四〇字に満たない小文にすぎないが、多くの流布本が有り、誤字・脱字がかなり見られ、曲轅犁の構造を正確に理解するにはどうしても嚴密な本文校訂が必要である。この點について天野氏の勞作が有り、十數種の輯本を校訂して流布本の系統を、Ⅰ『笠澤叢書』系統本、Ⅱ『津逮祕書』系統本、Ⅲ『重編百川學海』系統本に

三大別している。⁽³⁾私は基本的にこの系統分類に賛成であるが、實際に本文校訂作業に着手してみると、必ずしも嚴密に三大區分できるものでないことが分る。また底本として特に優れた版本があるわけではなく、たとえ一見粗惡な流布本であっても、それなりに採るべきところがあり、いずれも粗略に扱うことはできない。これまで『耒耜經』の校訂を試みた研究者の數は多いが、本格的に行なったのは前述の天野氏のほかに宋兆麟・閻文儒・閻萬石の三氏である。⁽⁴⁾これらの先學の研究によって『耒耜經』がほぼ正確に讀解できるようになった。しかし、まだ共通の理解に到達していない點もあり、屋上屋を架する感もあるが、以下に列舉した『耒耜經』の各種テキストおよび注釋論文を参照して校釋を加え、ここに新たな輯本を提供したい。

(一) 校釋に用いた底本・各種テキスト・注釋論文一覧(「」に示したのはその略稱)

〔底本〕 周履靖編『夷門廣牘』所收本、萬曆丁酉(二十五年、西曆

一五九七年)序刊、內閣文庫所藏。臺灣の藝文印書館刊の『百部

叢書集成』所收本は本書の影印。

〔笠澤a〕 『笠澤叢書』、陳琰輯『古書叢刊』第一輯乙集所收、民

國十一年(一九二二)上海古書流通處影印、清嘉慶刊本を使用、

東洋文庫所藏。

〔笠澤b〕 『笠澤叢書』、『四庫全書珍本』第五集所收、臺灣故宮

博物院所藏文淵閣本影印、臺灣商務印書館刊、東海大學所藏。

〔笠澤c〕 『重刊校笠澤叢書』叢書丙冊所收、雍正九年(一七三

一)江都陸氏大壘山房重刊本、東大東洋文化研究所所藏。

〔甫里〕『唐甫里先生文集』卷之一九所收本、『四部叢刊』初編所收、上海商務印書館縮印江南圖書館藏黃堯圃校明抄本、欄外に校訂文字および卷末に成化本による張元濟の校訂有り、民國五十四年（一九六五）臺灣商務印書館重印、東海大學圖書館所藏。

〔津逮〕明・毛晉編『津逮秘書』第四集第六一冊所收本、崇禎庚午（三年、西曆一六三〇年）序刊、内閣文庫所藏。早稻田大學圖書館に同版の嘉慶十一年（一八〇六）影印本が架蔵されている。

〔百川a〕『重輯百川學海』癸集所收、明刊、内閣文庫所藏。早稻田大學圖書館所藏本は補充抄本で、異體字があるものの半葉の行数、一行の字数は同じ。また冒頭に「唐陸龜蒙著、聞啓禎閣」とある。百川bにはこの句なし。

〔百川b〕『重輯百川學海』癸集所收、序目は清初補、本文は明刊、内閣文庫所藏。

〔學津〕清・張海鵬編『學津討原』第十集第九五冊所收、嘉慶十一年（一八〇六）序刊、内閣文庫所藏。

〔全唐〕『欽定全唐文』卷八〇一所收、嘉慶十九年（一八一四）刊、民國五十四年（一九六五）、臺北の華文書局より影印刊、第一七冊に所収。

〔唐叢〕『唐代叢書』第四集第一冊所收、嘉慶十一年（一八〇六）刊、内閣文庫所藏、民國六十年（一九七二）臺北の新興書局より影印刊。東大東洋文化研究所所藏の『唐人說薈』（一名『唐代叢書』と表記されている）第二帙第一〇冊所收本は、たぶん本書の被影であろう。

〔說薈〕『唐人說薈』所收本、民國十一年（一九二二）上海掃葉山房刊、石印本、表紙に「一名唐代叢書」とある。テキストとして

はあまり良くない。早稻田大學圖書館所藏。

〔說郭〕明・陶珽重校『說郭』引一〇九、第一一二冊所收、弘治九年（一四九六）序、内閣文庫所藏。内閣文庫には順治四年（一六四七）の同版後刷本（引一〇九、第一〇九冊）有り。いずれも百川bと同版。

〔五朝a〕『五朝小説』第二五冊所收、刊年不詳、早稻田大學圖書館所藏。前掲の說郭と同版。

〔五朝b〕桃源居士編『五朝小説』の唐人百家小説の内、瑣記家第七十四帙所收、内閣文庫所藏。

〔五朝c〕『筆記小説大觀』第三八編『五朝小説』所收、石印本、民國七十四年（一九八五）に臺北の新興書局から影印刊、東海大學圖書館所藏。

〔居家〕『居家必備』第三冊治生上所收、明刊、内閣文庫所藏。五朝bと同版もしくはその被影。

〔山林〕明・屠本峻編『山林經濟籍』第四冊治農第三所收、明刊、内閣文庫所藏。内閣文庫には別の同書の江戸期抄本があるが、原本はこの明版。

〔古今〕『古今圖書集成』食貨典一、第三〇卷農桑部所收、臺灣の文星書店影印刊、東海大學圖書館所藏。

〔王禎a〕嘉靖九年（一五三〇）刊『王禎農書』農器圖譜之二、未帙門所引逸文、内閣文庫所藏。

〔王禎b〕『四庫全書珍本』別集所收『王禎農書』所引逸文、臺灣故宮博物院所藏文淵閣本影印、臺灣商務印書館刊、東海大學圖書館所藏。王禎aに比べて誤字が少ない。

〔三才〕明・王圻編『三才圖會』器用一、卷所引逸文、上海圖書館

藏明萬曆王忠義校正本影印、上海古籍出版社、一九八八年刊。系統としては王禎^aを踏襲している。

〔天野校〕 註(2)(3) 掲載天野元之助氏著書。

〔宋校〕 註(4) 掲載宋兆麟氏論文。

〔閻校〕 註(4) 掲載閻文儒・閻萬石氏論文。

〔註〕 Joseph Needham, "SCIENCE AND CIVILISATION IN CHINA", Vol. 6 Biology and Biological Technology, Part II: Agriculture by Francesca Bray, Cambridge University Press 1984, pp. 180-84.

(一) 『耒耜經』校訂文

耒耜者、古聖人之作也、自乃粒以來、至於今、生民賴之、有天下國家者、去此無有也、飽食安坐、曾不求命稱之義⁽¹⁾、非楊子所謂如禽者邪、余在田野間、一日呼畊⁽²⁾、就而數其目、恍若登農皇之庭、受播種之法、淳風泠泠、聳豎毛髮、然後知聖人之旨趣、朴乎其深哉、孔子謂吾不如老農、信也、因書爲耒耜經、以備遺忘、且無愧於食。

經曰、耒耜、農書之言也、民之習、通謂之犁、治金而爲之者、曰犁鑣⁽³⁾、曰犁壁、斲木而爲之者、曰犁底、曰壓鑣、曰策頷、曰犁箭、曰犁轅、曰犁梢、曰犁評、曰犁建、曰犁槃、木與金凡十有一事、耕之土曰墾、墾猶塊也、起其墾者鑣也、覆其墾者壁也、草之生必布于墾、不覆之、則無以絕其本根、故鑣臥而居下、壁偃而居上、鑣表上利、壁形下圓、負鑣者曰底、底初實于鑣中、工謂之斂肉、底之次曰壓鑣、背有二孔、係于壓鑣之兩旁、鑣之次曰策頷、言其可以扞其壁也、皆地然相戴⁽⁴⁾、自策頷達于犁底、縱而貫之曰箭、前如程而耨者曰轅、後如柄而耨者曰梢、轅有越加箭可弛張焉、轅之上又有如槽形、亦加箭焉、刻爲級、前高而後庫⁽⁵⁾、所以進退曰評、進之則箭下、入土也深、退之則箭上、入土也淺、以其上下類繖射⁽⁶⁾、故曰箭、以其淺深類可否、故曰評、評之上、曲而衡之者曰建、建榷也、所以柅其轅與評、無是則二物躍而出、箭不能止、橫於轅之前末曰槃、言可轉也、左右繫、以揔乎軛也、轅之後末曰梢中、在手所以執耕者也、轅取車之胸、梢取舟之尾、止于此乎、鑣長一尺四寸⁽⁷⁾、廣六寸、壁廣長皆尺、微橢、底長四尺、廣四寸、評底過壓鑣二尺、策頷減壓鑣四寸、廣狹與底同、箭高三尺、評尺有三寸、槃增評尺七焉、建惟稱絕⁽⁸⁾、轅修九尺、梢得其半、轅至梢中間掩四尺、犁之終始丈有二、耕而

後有爬、渠疎⁽³⁰⁾之義也、散墮去芟者焉、爬而後礪磳焉、有礪磳焉、自爬至礪磳、皆有齒、礪磳⁽³²⁾觚稜而已、咸以木爲之、堅而重者良、江東之田器、盡於是、耒耜經終焉。

【校註】「〔1〕命 王禎 a は「名」に作る。

〔2〕楊子所謂如禽者邪 この句は戰國時代の道家に屬する楊朱一派の徹底した逸樂主義を禽獸の如しとした故事を指すのであろう。

〔3〕畊 諸本

は「耕」に作る。北田氏の研究によれば、「畊」は陸龜蒙が自己の莊園内の莊客に對してしばしば用いた呼稱であるとする。

〔4〕農皇 神農や后稷等の農業神。全唐は「農黃」に作る。

〔5〕庭 底本は「度」に、諸本は「庭」に、王禎 a b は「廬」にそれぞれ作る。諸本に從う。

〔6〕吾不如老農 論語「子路篇」の句。

〔7〕農書 百川 a b・笠澤 c・說書・五朝 c・古今・王禎 a b・三才・天野校は「農」に作る。

〔8〕治 底本は「治」に作るが諸本に據って改む。

〔9〕犁鏡 諸本は「犁鏡」に作る。通常、犁鏡は耕起した土壠を反轉させる撥土板のことで、犁碗(盤)とも稱される。しかし、ここでは後文からも分るように犁鏡に作るのが正しい。諸本の細字註に「本作鏡」と記されているので、本文を犁鏡と改めたテキストが流布していたものと思われる。底本にもこの細字註が有るのは、註を残したまま後人が本文を校訂したためである。

〔10〕金 諸本によりこの一文字を補う。

〔11〕臥 底本および諸本は「引」に作るが、笠澤 a・全唐に據って改む。王毓璠校訂『王禎農書』(農業出版社、一九八一年、二〇二頁、註三)

において「引」は「臥」に作るべしとしている。

〔12〕策領 全唐は「策領」に作る。「領」は「額」の本字。閻校に策は竹簡を連ねた冊狀の意で、犁壁・壓鏡・策領の三つの部材が一續きに連な

っているところからこの呼稱が生じたとする。

〔13〕黠然 王禎 b の細字註に「黠餘頭切、物相連次也」とある。

〔14〕戴 笠澤 c・甫里・唐叢・說書・百川 a b・古今・五朝は「載」に作る。

〔15〕程 天野校は「にないぼう」、ブ譯は「車軸」と註記。王禎 a b・三才は「周禮」考工記・輪人の條を細字註に引き、車蓋の柄が插入される柱狀の「杠」とする。杠は「楨」にも通ずるので天野説に從う。

〔16〕加 底本・諸本は「如」に作る。前文に「轅有越加箭」とあり、この槽狀の評にも犁箭が貫くのであるから、王禎 a b・三才に據って「加」に改む。

〔17〕庫 全唐・五朝は「卑」に作る。

〔18〕深、退之則箭上、入土也 この九文字は底本・津逮・學津・百川 a b・王禎 a b・三才にのみ有り。

〔19〕繳射 底本・諸本は「激射」に作る。天野校の「照準器」、ブ譯の「弩の調整具」に従い「激」をや(イグルミ)を意味する「繳」に改む。

〔20〕榧 底本は「榧」に作るが王禎 a b・三才に據ってカンヌキを意味する「榧」に改む。

〔21〕握 底本は「握」に作るが天野校に従い「牽」を意味する「握」に改む。

〔22〕枴 中宋校は犁枴に装着された把手、ブ譯は犁枴の中間を貫いた轅の先端(把手兼用)と解す。天野校・閻校は「後末曰枴、中在手」と句點を打ち、「中」を犁枴に装着された「小木柄」つまり把手に解す。

〔23〕取 諸本によりこの一文字を補う。

〔24〕胸 底本は「臂」に作るが、諸本に據って正體字に改む。

〔25〕寸 底本は「才」に作るが諸本に據って改む。

〔26〕評底 笠澤 a は「評」の一文字無

し。宋校もこの一字を削除して後文の「二寸」を「三寸」にすべしとしている。ここでは削除せずに評底聞の長さとして解しておく。

〔27〕領 王禎^a・三才に據ってこの「文字を補う。」〔28〕建

惟稱絶 諸本は「惟」を「雄」に作る。また「絶」は笠澤^aは細字に、王禎^a・三才は細字註で「元注絶」と表記。王禎^bはこの一字なし。天野校は「絶」の一字を削除して「大いさがつりあう」と解

するが、この句は「建にはつりあつた規定の寸法はない」の意である。〔29〕尺 底本は「凡」に作るが諸本に據って改む。

〔30〕渠疎 『方言』巻五の「把」の解説に「宋・魏之聞、謂之渠、或謂之渠疏」とある。〔31〕礎 底本は「毒」に作るが諸本に據って改む。

〔32〕觚 底本は「觚」に作るが諸本に據って改む。

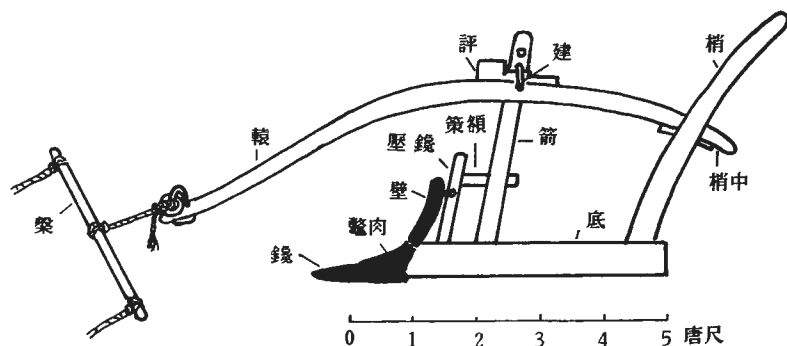
(三) 『耒耜經』全譯

耒耜は往昔の聖人の制作にかかるもので、穀食をするようになってからこの方、人々の生活は農作物に依存している。天下國家を治める者は、これ無くして統治できるものではない。飽食安坐して君主としての責務をいささかも自覺しないようでは、禽獸のように安逸を食った楊朱の徒と變らないではないか。私は農村に住んでいるが、時には（自分の莊園の）農民に聲を掛け、しばしば彼らの仕事ぶりを見聞する。それはあたかも（神農や后稷などの）農業神の園圃に入つて、栽培技術を教わっているかのような錯覺に囚われる。淳風がそよそよと吹いて髪をなびかせ（るように教化が自然に浸透し）、そこではじめて聖人の意圖がいかに敦朴で深いかを察知した。孔子が「農作のことについては老農に及ばない」と語つたのは至言である。そこで『耒耜經』を著して遺忘に備え、農業の有難さを膽に命じておくことにする。

『耒耜經』に言う、耒耜は農書に記録された呼稱であつて、人々の間では傳統的に犁と稱されている。鐵材からできている部分に、犁鑣（スキヤキ）と犁壁（スキベラ、犁鏘、撥土板）があり、木材からできている部分に、犁底（イザリ、犁床）・壓鑣（スリツケ）・策頤・犁箭（タタリカタ、犁柱）・犁轅（トリクビ、ネリギ）・犁梢（オイタテ）・犁評・犁建・犁槃（ヒキツル、シリカセ）がある。つまり犁は木材と鐵材を素材とした十一の部分から成っている。耕起されるべき土壤を墾と稱する。墾は土塊のことである。その墾を耕起するのは犁鑣で、翻轉するのは犁壁である。雜草は必ず墾に繁茂するので、翻轉し

ないとその本根を根絶できない。だから犁鑣は臥した形で下部に、また犁壁は仰向けの形でその上にそれぞれ位置しているのである。犁鑣の先端は鋭利で、犁壁の形は一端が圓弧状になっている。犁鑣に装着される部材を犁底と稱する。犁底が犁鑣に嵌め込まれると、工匠は（甲羅に入った龜の身體を連想するところから）これを鼈肉と稱している。犁底の次は壓鑣であるが、（犁壁の）背面には二つの孔が有り、（ここに繩を通して）壓鑣の兩端に縛りつけ犁壁を固定する。（壓鑣の次は策領、これが有るおかげで犁壁が保護される。（犁壁・壓鑣・策領の三者は）いずれも順序よく連なっている。

策領から犁底まで縦に貫いている部分を犁箭と稱し、先端が桎（擔い棒）のように灣曲している部分を犁轅と稱する。後部の柄状の高くなった部分を犁梢と稱する。犁轅には柄穴が有り、これで犁箭の緊張具合を調節できる。また犁轅の上には槽形をした部品が装着されていて、やはり犁箭に調節を加えることができる。この部品は階段状に段差があり、前が高くて後が低く、前後に進退できることから（勤務評定に掛けて）評と稱する。これを前進させると犁箭が下がって入土角度が深くなり、これを後退させると犁箭が上がって入土角度が浅くなる。上下できる様子が繳射に似ているので（犁柱のことを）箭、また耕深を調節する様が（評定の）可否に似ているので（槽形の部品を）評とそれぞれ稱するのである。犁評の上部にあつてこれを留めている部品を建と稱する。建は榿（カンヌキ）の意で、犁轅と評とを固定する働きをする。これが無いと（犁轅と評の）二つの部品はがたがたしてずれしまい、犁箭は固定することができない。犁轅の先端に横たわっているのが槃である。槃の語義は（盤旋の盤に通じて）旋轉できるの意である。その犁槃の兩端に結ばれた繩が輓で牽引されるのである。犁轅の後端を梢中（ツク、ツカミ、把手）と稱する。これを執ることによって犁を操作できる。轅はさながら車の胸部に、梢はさながら舟尾に相當する。犁の構造については以上のようなところであろう。犁鑣は長さ一尺四寸、幅六寸。犁壁は幅、長さともに一尺で、やや楕圓形狀を呈している。犁底は長さ四尺、幅四寸。評と犁底間の長さは壓鑣より二尺長い。策領の長さは壓鑣より四寸短く、その幅は犁底と同じ。犁箭は高さ三尺、評は一尺三寸、犁槃は評よりも一尺七寸長い。建にはこれと言った規定の寸法はない。犁轅の長さは九尺、犁梢の長さはその半分とする。犁轅



圖版1 唐代曲轆犁復原圖（渡部作圖）

（と犁箭の接點）から梢中までの間の長さは四尺で、犁の全長は一丈二尺である。犁耕の後に爬（耙）作業を行なう。爬とは渠疎（マガワ）のことである。これで壤（土塊）を粉碎して刈株を除去するのである。爬作業の後に礮礮および礮礮をかける。爬ならびに礮礮はどちらも齒が有るが、礮礮には稜角が有るだけである。いずれも木でできており、堅くて重いものが良い。江東地方の農具は以上述べたことに盡きる。ここに『耒耜經』を書き終える。

以上、『耒耜經』について校釋を加えてきたが、この曲轆犁の最大の特徴は、（一）梓型犁で、しかも搖動犁であったこと（ただし轆畜の頭數についての記述を缺いている）。（二）轆に對して犁箭を上下にずらし、これを犁評と建とを用いて固定することによって、犁鏵の入土角度つまり耕土の深淺を調節できたこと。（三）片側に撥土する犁鏵（たぶん曲面犁鏵）を備えていたこと。（四）從來の長直轆に代つて短曲轆を採用することで轆畜の牽引力が低位置に傳導され、犁が所定の深度で水平に操作できるようになったこと。⁽⁵⁾（五）水田の精耕細作である耕一耙一鈔耕作體系の中で、この犁が用いられていたことなどである。ただここで問題になるのは『耒耜經』に記されている犁の寸法が、唐代の大尺および小尺のいずれを用いていたかが明らかでないことである。天野氏は大尺（一尺を二九・四cmに換算）⁽⁶⁾を適用しており、これで計算すると犁の全長は三五二・八cmになり、實に巨大である。多くの研究者は唐代の曲轆犁を轆畜一

頭に牽引させたと考えており、私も実際に中國各地で一頭曳きの犁を多く見てきたが、このように長大な犁を輓畜一頭に曳かせた例を知らない。その点については宋兆麟氏も、また最近、曲轅犁の機能について分析した楊榮琰氏も同様の疑問を提示している。⁽⁷⁾いま萬國鼎氏が算出した唐小尺（一尺が二四・六cm）で換算すると二九五・二cmとなる。⁽⁸⁾これでもまだ大きいという印象を受けるが、それが適正であるかどうかの斷定を下す資料が無いので疑問として留めておくことにする。なお曲轅犁がどのような犁であったか、前掲の『耒耜經』の記述、宋代以降の諸「耕織圖」・『王禎農書』および宋兆麟・閻文儒・閻萬石・ブレイ (G. Bray) などの諸氏の研究に基づいて復原したのが圖版1である。

三 魏晉から唐代にかけての犁耕圖の検討

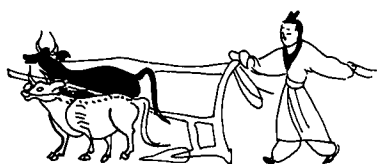
唐代の曲轅犁の成立事情を知るには、それよりも以前の時代および同時代の具體的犁耕圖の検討が必要となってくる。歴代の犁耕圖の検討は、犁の構造や耕作法を理解する上で重要であるばかりでなく、そこに見られる形態の變化は他地域との農耕技術の交流を考える上でも貴重な指針をわれわれに與えてくれる。漢代の犁耕圖についてはすでに前稿で検討を加えたので、以下、魏晉時代から唐代にかけての犁耕圖と關連の耕作圖を検討してみることしよう。

事例一 甘肅省河西地方出土魏晉・十六國時代の農耕圖壁畫・魏晉時代は中原地方が相次ぐ政争で治安が亂れ、比較的政治の安定した河西地方に難を避けて多くの人々が移住し、この地方の文化水準が向上し、多彩な壁畫墓が發達した。壁畫墓は一九五〇年代より正式に發掘が開始され、⁽¹⁰⁾現在までのところ永昌縣東四溝、張掖縣葫蘆墩子灘、嘉峪關市新城・牌坊梁・長城大隊、酒泉縣丁家閘・崔家南灣・下河清・五壩河・石廟子灘、玉門市驢馬城などの各地から多くの壁畫墓が發見されている。⁽¹¹⁾これらの壁畫墓の特色は磚壁もしくは個々の磚の表面を白く化粧塗りした上に達者な筆遣いで描畫着彩するもので、題材は農耕圖をはじめとした各種の生業、家庭生活・娛樂・軍事（ことに嘉峪關三號墓の屯營と屯墾の圖は曹魏の屯田情況を示しているとも言われる）⁽¹²⁾などを含み、佛傳圖等の宗教的要素が缺落して完全な風俗畫になっているのが興味深

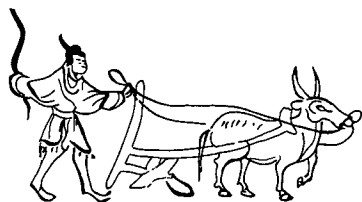
い。これらの當時の壁畫群は河西一帯で共通した風格を具えており、系統を同じくする畫工集團が活躍したことをうかがわせ、次代の唐代の敦煌佛教壁畫等の架橋をなすものとして貴重である。⁽¹³⁾

上記の磚壁畫の内、逸早く一般に公開されたのは嘉峪關のもの模寫である。この模寫は一九七五年に、わが國の東京と大阪の高島屋デパートで開催された「中華人民共和國漢唐壁畫展」で展覽され、われわれに深い感銘を與えた。近年、嘉峪關壁畫墓についての正式報告書が刊行され農耕圖の全貌がおおむね明らかになった。⁽¹⁴⁾ 結論から先に言うと、魏晉・十六國時代の河西地方の犁は漢代の華北一帯に用いられていた方形柶型犁を繼承していた。これには一牛で牽引する雙轆タイプの犁（圖版2）⁽¹⁵⁾と二牛で牽引する、いわゆる「二牛擡槓式」の犁が見られ（圖版3）⁽¹⁶⁾、いずれも乾地農法用の典型的な淺耕犁である。しかも驚いたことに犁耕圖のほかに、耕起した土塊を粉碎する耙作業の圖（圖版4）⁽¹⁷⁾、覆土鎮壓作業の糖地圖（圖版5）⁽¹⁸⁾、それに犁で作條して播種溝をこしらえ、その後播種・平糖する「耕（耕）種」圖（圖版6）⁽¹⁹⁾まで出土している。これらの農耕圖は耕—耙—耨の乾地農法體系を示すものにはかならない。これらの耕作圖を詳細に検討した天野氏も「魏・晉時まず牛犁で耕起し、耙で土塊を破碎し、耨で平摩してのち、犁で播種溝をつくって種をまき、糖で覆土・鎮壓する「保墒」すなわち土壤水分の蒸散を可及的に抑える平うね農法、そして耕・種同時一貫作業が、この西北邊僻の「河西」の地で既に行われていたことを示している」と述べている。⁽²⁰⁾ 從來、われわれは乾地農法體系の知識について、六世紀前半の賈思勰が著す所の『齊民要術』からもっぱら得てきた。だがここにさらにそれより二世紀餘も遡る乾地農法體系の確かな證據を得ることになったのである。

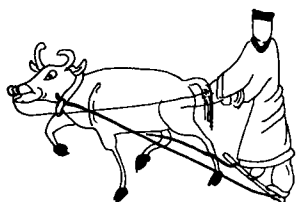
『嘉峪關壁畫墓發掘報告』によると圖版6の犁は犁箭（犁柱）が轅を突き抜け、その犁箭の途中に斜に交差している横木は壓鐵の機能をなすものであり、圖版2・3の犁とは異なるとしている。しかし私が考えるところでは、この横木は圖版2・18と同様板狀の撥土板ではあるまいか。また一頭の牛で犁・耙・耨を曳かせるのに繫駕具として曲軛が普及していたことが判明する。



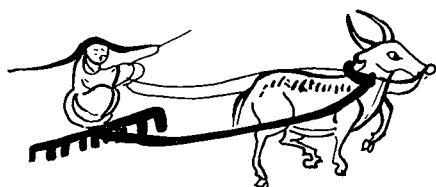
圖版3 嘉峪關5號墓壁畫中の
二牛擡槓式杵型長床犁



圖版2 嘉峪關6號墓壁畫中の
一頭曳き杵型長床犁



圖版5 酒泉石廟子灘壁畫
墓の墾地作業圖



圖版4 嘉峪關6號墓壁畫中の耙地
作業圖



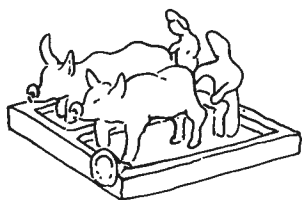
圖版6 嘉峪關1號墓壁畫中の耕種圖



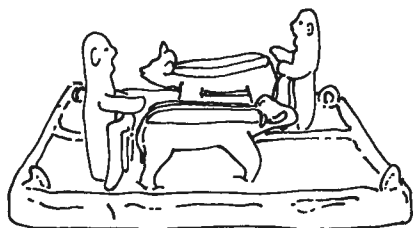
圖版8 遼寧省朝陽袁臺子東晉壁畫墓中の犁耕圖



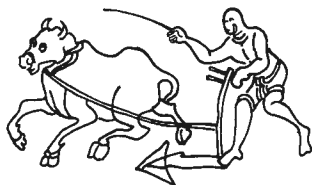
圖版7 克孜爾（キジル）千佛洞第175窟壁畫中の犁耕圖



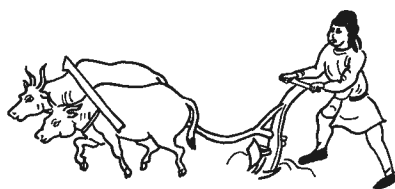
圖版10 廣西壯族自治區梧州南朝墓出土犁田模型（一部復原）



圖版9 廣東省連縣出土西晉犁田耙田模型



圖版12 敦煌莫高窟第290窟の北周時代の犁耕圖



圖版11 陝西省三原出土唐代李壽墓壁畫中の犁耕圖

事例二 新疆ウイグル自治區拜城縣克孜爾(キジル)千佛洞一七五窟晉代犁耕圖壁畫(圖版⁽²¹⁾7)…天山山脈の南邊、庫車(クチャ)の西に位置するキジル千佛洞は敦煌の千佛洞と並んで有名である。開整年代の上限は後漢時代で下限は宋・元時代である。晉代に開整されたと考えられる一七五窟の甬道壁面に、犁耕圖と鐵鋤(クワ)を用いた農作業圖が描かれている。

鐵鋤は現在も當地で使用されている「坎土鋤」と稱されるクワと全く變りがないとのことである。犁耕圖について閻文儒氏は「牛耕圖中の幅廣の鐵鋤は發見された漢代の鐵鋤に比較的類似している」と述べ⁽²³⁾、また王炳華氏は「この二牛、擡槓式の耕作圖は同時期の嘉峪關壁畫墓中に見られる牛耕圖に近似している」と述べている⁽²⁴⁾。この圖は一見すると確かに二牛で曳いているかのように見える。しかしこれを二牛擡槓式と呼ぶのは妥當ではない。牛は二頭並んでいるが、實際に犁を牽引しているのは手前の一頭である。犁を軌畜の片側に装着する方式は本來の中國本土に起源するものではなく、おそらくは西アジアの乾燥地帯での方式が傳來したものであろう⁽²⁵⁾。そもそもこのターリム盆地は、漢人の入植が開始される以前には、インド・アリア系の言語トカラ語を話す人々が、あたかも楔を打ち込むように當地方に進出しており⁽²⁶⁾、晉代においても彼らの活躍が依然として見られ、それが佛教壁畫の片隅に風俗畫として描き留められたのであろう。

事例三 遼寧省朝陽縣袁臺子東晉時代犁耕圖壁畫(圖版⁽²⁷⁾8)…この壁畫墓は一九八二年に發見されたもので、中國東北地方における東晉時代の壁畫墓としては珍しい部類に屬する。壁畫の題材は墓主像・出獵・邸宅・庖厨・奉食・宴飲・牛耕・四神・日月星雲などで、漢代の畫像墓や壁畫墓と變るところがない。牛耕圖は剝落がかなりひどく進み、繪の細部を識別するのが困難で、發掘者は次のように報告している。「この圖は西壁の龕頂部に描かれており、畫面は縦三八cm×横七二cm、墨線で黒く縁取られ、紅色と黄色の二牛が犁を曳いて耕作している。犁を操作している人物は丸顔で、黒い帽子を被り、襟付きの短衣を着用している。襟と袖口は黒く縁取りされ、腰帶をし長袴を穿き、左手に犁梢を持ち、右手で鞭を振り上げ牛を追いつている。牛の前に立つ二人の人物は黒色の帽子、青色の短衣を着用し、彼らの襟と袖口もやはり黒く縁取られ、腰帶をし、耕作を手助けしているかのように見える。」⁽²⁸⁾

肝心の犁の構造は不明瞭であるが、描畫の殘存部分を丹念に辿っていけば、これが枠型長床犁であることは容易に推定がつく。また轆は二牛の頸に差し渡された犁衡まで達して描かれてはおらず、犁の本體の部分のところで灣曲しているのが氣になる。だが當初は犁衡に結着されて長轆に描かれてあったのが退色して現狀のようになってしまったのであろうか。この犁耕圖を見すぐに思い浮べるのは、『齊民要術』耕田篇に引かれた後漢・崔寔撰『政論』の「遼東犁」の記述である。この犁耕圖はまさに遼東犁の記述と照合させて考えるべきもので、それには「今（崔寔が活躍した二世紀中葉、彼は遼東太守を経歴したことがある）、遼東の耕犁は、轆の長さ四尺、迴轉相妨ぐ。既に兩牛を用い、兩人之を牽き、一人將て耕し、一人下種し、二人轆を挽く。凡そ兩牛・六人を用いて、一日に纔か二十五畝を種くのみ。其の懸絶すること此の如し」と説明され、遼東犁は二牛で輓引する轆の長さが四尺つまり一メートルほどの短轆犁であったことになる。袁臺子犁耕圖の犁を短轆犁と斷定するならば、兩牛の前の二人の人物が『政論』の「兩人之を牽き」の一節ともよく合致するようと思われる。それならなぜ方向轉換が便利な短轆犁を崔寔は「迴轉相妨ぐ」と解説したのであろうか。天野氏は犁床が長いものだったに違いなかったからと説明しているが、この一文に對して賈思勰は「今（六世紀初頭）、濟州（現在の山東省濟南地方一帯）より以西は猶長轆、兩脚轆を用う。長轆は平地を耕すに尚可なるも、山澗の間に於ては則ち用に任えず、且つ廻轉至つて難しく、力を費やし、未だ齊人の蔚犁の柔便なるに若かず」と山東地方の犁と比較した所見を述べているから、私は遼東犁の「四尺」という犁轆の長さにいささか疑問を感じている。なお賈思勰の言う蔚犁については、漢代の山東・江蘇地方出土の犁耕畫像石を前稿で分析した際、朝鮮の傳統犁「朱鉅（ザンギ）」に似た短床犁もしくは無床犁と推定しておいた。ともあれこの壁畫によって晉代の遼東地方で枠型長床犁が使用されていたことが判明したわけである。

事例四 廣東省連縣出土西晉犁田耙田模型（圖版9）³⁰…中國古代の稻作技術水準は、一時期文獻記錄上の「火耕水耨」の解釋をめぐって激しい論争が展開されたが、それとは別に陝西南部・四川・貴州・廣西・廣東などの各地から漢代の水田陂池模型が多く發見され、これらの確かな證據から當時の稻作技術が低水準でないことが分かり、われわれはこの方面の

認識を改めなければならない段階にさしかかっている⁽³¹⁾。江南および嶺南地方の水田犁は華北の長床犁が早くから轉用導入されていたばかりでなく、また耙や鈔といった土塊を破碎する農具も乾地農法用農具からアイデアを借用したものと考えられる。ここに取り上げた犁田耙田陶製模型は水田耕作における耕—耙—鈔體系を示す最古の具體例である。出土地點は廣西と湖南に隣接する廣東省連縣で、當地の西晉磚室墓を發掘した際、副葬品の中から發見されたのである。墓磚の銘に「永嘉四年庚午歲六月卅日立」とあるから、この墳墓は西曆三一〇年（西晉の懷帝の治世）に造成されたことになる⁽³²⁾。私はこの模型の實物を廣東省博物館で見たことがある。方形に近い田面（横一九cm×縦一六・五cm）の中心を畔で二分し、一方に犁耕作業、もう一方に耙作業を示す模型が配置されている。水田の四隅には漏斗狀の器具が設置されており、これは田の灌排水調整を行う漏水具と考えられている。犁の形狀はし字形をしており、明らかに長床犁（たぶん梓型犁）である。しかも牛一頭に曳かせているのであるから短轆犁であったと斷定できる。耙には六本の齒がついているが、これは模型なので實際のものより遙かに齒の数が少ない。實は正確に言うと、この農具は「鈔」である。現在でも中國の農村では水田の土塊を粉碎する作業を「耙田」と稱しており、これは耙および鈔のいずれでも行うことができる。そのため農具「鈔」を「耙」と稱する地域もある。最近、私が調査した廣東省番禺縣鐘村では水田の整備に犁と鈔をもっぱら使用し、江南地方の水田地帯で一般的に見られる「方耙」は用いていなかった。もしこれが伝統的な方式であるとしたなら、廣東地方では四世紀初頭以來、全く同様の農具體系を採用して稻作が行われてきたことになる。

これと類似した耙田模型（横一八cm×縦一五cm、一説には犁田模型、圖版⁽³³⁾）が、一九八〇年に連縣の西南約一七〇km、廣西壮族自治区梧州倒水公社所在の南朝磚室墓から發見されている。やはり田面は二分されていて、畔の一隅に同様の漏水具が設置され、轆畜には鼻環附きの水牛が用いられている。水牛は江南および嶺南地方で今日においても最も普通に見られる轆畜である。ところでこの水田耕作の耕—耙—鈔體系は、六世紀前半の荊楚地方（湖北・湖南）の民俗を記した宗懔の『荊楚歲時記』にも「四月、鳥有り、獲穀と名づく。其の名自ら呼ぶ。農人、此の鳥（の鳴く）を候ちて、則ち犁・耙（

耙)もて岸に上る」とあるから、長江流域および以南の基本的な水田耕作方式として廣く普及していたことが判明する。

事例五 陝西省三原縣唐淮安靖王李壽墓壁畫中の犁耕圖(圖版11)⁽³⁴⁾…この犁耕圖は、一九七三年西安市の北方四〇kmほどの三原縣李壽墓第三天井部壁畫中から牛一頭曳きの二脚耨圖、牧牛圖等と共に發見された。李壽(五七七—六三〇)は唐の高祖李淵の堂弟(いとこ)であるので、この犁耕圖は初唐時代に屬する。⁽³⁵⁾發掘報告書に據ると「犁の構造ははっきりしている。犁鏵はほぼ三角形をなしており、尾端の兩角は尖り兩翼狀を呈している。これは河南三門峽出土の唐代鐵鏵に類似している。犁梢と犁底は別れておらず梢の末端は灣曲して直接犁鏵の孔内に插入され、梢の上端には横木の把手がある。犁鏵の向って右側に策頰に固着された犁壁が有るが、耕深を調節する犁評は無い。單直轅で轅の長さは不明であるが、二牛の頸に差し渡された横木から推し量るなら長轅であろう。これは目下のところ唐代の「牛耕圖」でも最も早期の圖像資料である」と記されている。⁽³⁶⁾直轅とするのは曲轅の誤植かと思われるが、この犁が長曲轅の無床犁であるのは注目に値する。つまり同じ淺耕犁でも従来の枠型長床犁に比べてより深耕が容易であつたに相違なく、畝立て耕作用に使用されたと考えられている。⁽³⁷⁾この犁箭(犁柱)の無い犁は後述の敦煌壁畫中の犁耕圖で言及するように、たぶん魏晉南北朝時代末期に中央アジア經由で西方から傳來したものであろう。また曲轅の採用は前述の遼寧省袁臺子東晉時代犁耕圖にその形跡が見られるが、この李壽墓壁畫が最も早期の確實な事例である。曲轅を導入することによって犁轅の末端と犁衡との間の角度傾斜が緩くなり、牛にかかる負擔を軽減したはずである。⁽³⁸⁾犁轅に曲木を用いる發想は唐代においてかなり普及していたとみえ、『朝野僉載』卷一に次のような話が記載されている。

貞觀年中(六二七—四九)、定州鼓城縣(現在の河北省晉縣)の人魏全、家富めり。母、忽に失明し、卜者王子貞に問う。子貞、爲に之を卜いて曰く、明年人の東より來たり、青衣なる者有り。三月一日に來たりて療し必ず愈ゆ、と。時に至りて一人の青き紬襦を着れるを候い見て、遂に邀えて爲に飲食を設く。其の人曰く、僕、醫を解さず、但だ犁を作るを解すのみ。主人の爲に之を作らん、と。斧を持ちて舍を繞り犁轅を求む。桑の曲れる枝の井上に臨めるを見る。

	北 周	初 唐	盛 唐	中 唐	晚 唐	五 代	宋	西 夏
一手扶犁	2		7	10	9	11	12	1
雙手扶犁				2				
一牛挽引	1		2	3		2		
二牛挽引	1		5	8	9	10	12	1

表1 敦煌壁畫中の犁耕圖の操犁方式と挽畜數

遂に斫下するや、其の母の兩眼煥然として物を見る。此の曲桑の井を蓋うの致す所なり。

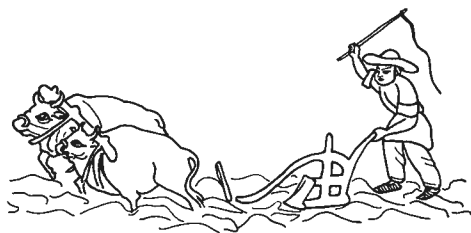
われわれは『耒耜經』に記録された短曲轅の前段階として長曲轅の普及を考慮に入れておかなければならない。

事例六 甘肅省敦煌莫高窟・安西榆林窟壁畫中の犁耕圖…甘肅省の敦煌莫高窟および安西榆林窟壁畫中に、南北朝から五代・宋・西夏時代にかけての農耕生産圖が散見する。この方面での初期の報告には金毓黻・王靜如氏の手に成るものがあり、近年では敦煌研究院の王進玉氏が周到な農耕圖の總合調査報告を發表している。⁽³⁹⁾現在の段階では王進玉氏の調査報告書が最も多くの犁耕圖を網羅しており、北周から西夏時代までの犁耕圖を五十五例（内十三例の圖版を掲載）採集している。氏の「農作圖調査表」に依據して、制作時代・操犁方式および挽畜數によつて犁耕圖を整理すると表1のようになる（剝落がひどくて區分が不明のものは除外した）。王氏が公表した十三例の犁耕圖にはいくつかのタイプがあり、ここにすべてを列挙する必要もないので、五例だけを對象にして検討を加えておくことにする。

第一は莫高窟第二九〇窟の北周時代の犁耕圖（圖版12）。この犁は一頭曳きの、たぶん雙轅犁で、犁床には非常に大きな犁鏵が装着されており、本來は犁箭（犁柱）の描かれた枠型長床犁であつたと思われる。同様の犁は莫高窟第二六九窟北周時代壁畫中にも見られる。ただしこちらは二牛擡槓式である。敦煌壁畫中の犁耕圖ではこの二點が最も古く、犁の形態としては魏晉時代の嘉峪關壁畫に見られるタイプと同一である。そして非常に興味深いことは、唐代以降になるとこの地方の壁畫中の枠型長床犁は主役の座を降りて後述の二犁型の犁に代



圖版14 敦煌莫高窟第108窟
の五代の犁耕圖



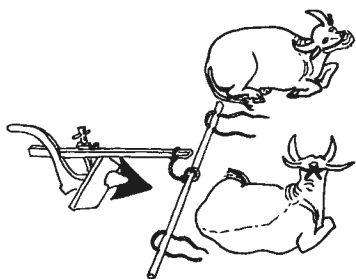
圖版13 敦煌莫高窟第445窟壁畫中の曲轅犁
(盛唐)



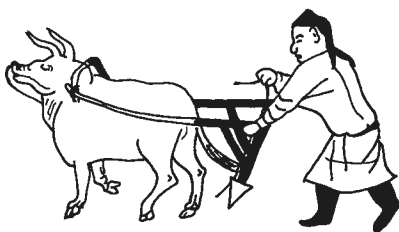
圖版16 敦煌榆林窟第25窟の
中唐時代の犁耕圖



圖版15 敦煌莫高窟第361窟の
中唐時代の犁耕圖



圖版18 藤井有鄰館所藏『南詔
圖傳』所載の犁耕圖



圖版17 上品蓮臺寺所藏奈良時代寫本
『繪因果經』所載の犁耕圖

られていく。

第二は莫高窟第四五窟の盛唐時代の犁耕圖（圖版⁽¹³⁴⁾）で、これは莫高窟壁畫中の唯一の曲轆犁圖として、また『耒耜經』の曲轆犁より早期のものとして早くから注目を集めてきた。この犁は長曲轆なのか短曲轆なのか定かでないが、轆の先端にある横棒を犁槃に見立てると短曲轆とも考えられる。しかし、二頭の輓畜にこの犁槃を用いるのは疑問が有るので断定は控えておくことにしよう。策領は犁箭を貫いて犁鐮から犁梢に伸びて接合しており、犁箭は轆を貫いている。また二頭の頸に差し渡された二重軛は漢魏時代の畫像に見える單純な犁衡より一段と進歩しており、こうしたタイプの二重軛は「アフガン型」と命名されている。⁽⁴¹⁾

第三から第五までの三例は、莫高窟第一〇八窟（圖版14、五代）・同第三六一窟（圖版15、中唐）・榆林窟第二五窟（圖版16、中唐）の犁耕圖で、これらは一頭曳き雙轆犁と二頭曳き長轆犁（二牛擡槓式）の相違があるものの、弋犁型の無床犁に近い同一タイプの犁である。王進玉氏が掲載した犁耕圖十三例中、實に八例がこのタイプの犁で（犁梢・轆間の補強材の無いものを含む）、しかも時代は唐代から宋代にまで及んでいる。かつて私も前稿において、このタイプの犁をスタイン・コレクションの敦煌佛畫から一點抽出紹介したことがある。また李壽墓壁畫の曲轆犁もこのタイプの犁である。アジア各地の犁を實際に廣く調査して歩いた應地利明氏の研究を参照するならば、この犁はインド犁のB2—2タイプに屬する。現在このタイプの犁の分布は局地的でバングラデシュ、西ベンガルの一部を含むインドのアッサム周邊とパキスタンのバルーチスタンに見られるにすぎない。しかし、かつてはインド大陸全域にわたって廣く分布していて、後に別のタイプの犁に代替されて周邊の犁型の漸移地帯に點在的に殘存するだけになったのではないかと推定されている。⁽⁴²⁾もしこの假説が正しいとしたなら、たぶん南北朝末期以降にこのタイプのインド犁が中央アジア經由でインドから中國に傳來し、關中盆地にまで達したのだと考えられる。

事例七 日本京都上品蓮臺寺所藏奈良時代寫本『繪因果經』所載の犁耕圖（圖版⁽⁴³⁾）…この『繪因果經』は繪入りの『過

去現在因果經』のことで、その原本は中國から請來されたく、傳存の寫本は天平勝寶年間（七四九—五七）以降に臨模されたものである。現在は斷卷となつて諸家の間に分散所有され、犁耕圖の部分は京都の上品蓮臺寺に所藏されている。

この犁耕圖は明治以後多くの研究者によつて取り上げられ、正倉院所藏の「子日手辛鋤」や朝鮮の傳統犁などと關係づけられて議論されてきた。しかし、議論が臨模のそのまた臨模に依據して行われたため、問題は豫想もしなかつた方面に發展していつてしまった。これを書誌學的に嚴密に分析し原點に引き戻したのは河野通明氏である。河野氏は、この犁耕圖は隋代もしくは唐代の北中國の一頭曳き犁耕を寫したもので、わが國で用いられた犁ではないとの判斷を下している。⁽⁴⁴⁾天野氏は「シード・ボックスの無い一脚轡を想わせる」と述べているが、私は圖版14に見られるような犁が、畫家のこの方面の知識不足によつて不正確に描かれたのではないかと考えている。いづれにしてもこの犁耕圖が唐犁を表しているという見解については賛成である。

事例八 日本京都藤井有鄰館所藏寫本『南詔圖傳』所載の犁耕圖（圖版18⁽⁴⁵⁾）…この『南詔圖傳』はもと清宮に架藏されていたもので、義和團事件の時に八箇國連合が北京に侵入した際、國外に持ち出され所藏者を轉々と代えた末に、わが國の藤井有鄰館に收藏されたのである。亡佚した原本は九世紀末に描かれ、現存の寫本は早期の忠實な臨模と考えられている。⁽⁴⁷⁾雲南地方における犁耕の開始は、指標となる前漢時代石寨山遺跡出土の遺物およびその畫像中にスベード狀の鏹（鍬の一種）は有るが、肝心の犁を缺いているところから、一般的に考古學者の間では後漢時代以降に犁が導入されたと考えられている。⁽⁴⁸⁾この『南詔圖傳』中の犁耕圖は時代がかなり下るとはいえ、雲南地方最古の關連圖像資料なので、はなはだ貴重である。犁の形態は犁梢と犁床とが一木から成つていて、犁箭が轅を貫いているから杵型犁である。しかも犁箭の先端には『耒耜經』に言うところの建と評に相當する部材が装着されているのが興味深い。犁箭に寄り掛かるようにして犁床に嵌め込まれた木板は撥土板であらう。犁床の先端には巨大な二等邊三角形の鐵鐮が装着されている。輓畜には水牛が用いられており、今日でも雲南地方では水牛による輓犁は普通に見られる。ところで、唐代の樊綽が著した『蠻書』卷

七に據れば、曲州・靖州（四川・雲南・貴州の境）以南、滇池以西では田畑輪換による稻・麥二毛作が行われ、その際「田を耕す毎に三尺の犁を用う。格（犁衡）の長さは丈餘、兩牛相去ること七、八尺、一人人前に牛を牽き、一人人犁轅を持按し、一人人耒を乗る」とあるように、二牛三人で操作する犁が用いられていた。⁽⁴⁹⁾ 原本『南詔圖傳』の成立と樊綽の活躍の年代はほぼ同じころであるから、兩者は同一タイプの犁であったかもしれない。

以上、八つの事例に區分して都合十七點の魏晉—唐代間の犁耕圖關係資料を検討してきた。こうした個々の具體的な犁耕圖から江東の曲轅犁の成立がどのように考えられるか、以下の章で整理してみることしよう。

四 曲轅犁の成立について

漢—唐間の犁耕圖を概観して氣づく最大の特色は、唐代に弋犁型のインド犁が中央アジア經由で導入されたにもかかわらず、中國においては一貫して梓型犁が優越的位置を占めてきたことである。中國古代の梓型犁には犁梢と犁床とが別木から成る長床タイプのもと、兩者が一木から成る無床犁に近いタイプのものが有り、いずれも犁柱を具備しているところから犁鏵の装着を容易ならしめ、すでに漢代において各種の犁鏵の出現を見るに至った。この土壤の翻轉をより効率よくする犁鏵の考案は、世界に誇ることができる古代中國人の英知でもある。また二つのタイプの梓型犁は共に淺耕用で、華北の乾燥地帯で今日に至るまで用いられてきている。淺耕用の梓型犁がかくも長期にわたって命脈を保ち得たのは、年間降雨量が極端に少ない當地方では、保澤防旱のために入念な土壤處理が要求されたからである（ちなみに華北地方の年間平均降雨量は四〇〇〜八〇〇mmで、その大半が夏季に集中して降る）。ことに夏季には保澤、作物の成長促進および雜草の除去のための中耕が、また春秋には播種用の水分確保のための春耕と秋耕がそれぞれ必須で、その方法は表土を鋤で丹念に耕すか、犁で淺く起こし、その土壤を耜、耨および耨で攪拌鎮壓して土中の毛細管現象を遮斷してやるもので、これらの措置は地上に降る雨澤をできるだけ土中に封じ込めてしまおうとする努力の現れにはかならない。『齊民要術』卷頭雜

説の「鋤頭に三寸の澤あり」、耕田篇の「凡そ秋耕は深きを欲し、春（耕）夏（耕）は浅きを欲す。犁は廉き^{せま}を欲し、勞（耨）は再なるを欲す」、さらには『王禎農書』所引『種蒔直説』中の「犁一耙六」といった農諺は、いずれも耕一耙一耨體系の乾地農法を實にうまく言い得ている。

このような乾地農法の體系は嘉峪關壁畫に顯著に表現されており、また前稿で紹介した山東省滕縣出土の後漢時代畫像石にもその片鱗が見られる。つまり華北乾燥地帯の耕一耙一耨體系は六世紀の賈思勰の『齊民要術』の記述を待つまでもなく、すでに漢代には完成して早期にこの技術體系が江南および嶺南の水田地帯に導入され、耕一耙一耨體系に改變受容されていったと推定できる。その時期は後漢末から魏晉南北朝にかけての人口移動の激しい混亂期に、瞬く間に廣がっていったに相違ない。というのは廣東や廣西で出土した圖版9・10の犁田耙田模型がそのことをよくものがたっており、漢代の陂池稻田模型を多く出土する四川・貴州地方の例にも見られるように、少數民族が錯居する地帯でのこうした農耕模型副葬品は、當時の文化水準の優越を誇示する意味で隨葬されることが多かったからである。また渡部忠世氏が「インドスキにしろシナスキにしろ、本來は畑地の道具です。これが水田に應用されたのがガンジスの中流と、揚子江の中・下流の地域だと思うのですが、兩方とも、それまでの東亞半月弧なり原農耕圈からひろがった稻作から見ますと、破格に平坦な廣い地域で取り入れられたわけですよ」と指摘しているように、⁽⁵⁰⁾華北の犁型犁ことに長床犁タイプのものは、水田における安定性の良さも手傳つて、江南から嶺南にかけて延々と續く廣大な平坦地に抵抗なく受容されていったと思われる。

曲轅犁も改良された犁型長床犁の一種で、從來はこれが江東地方で獨自に考案されたと思われるが、實際に陸龜蒙の『耒耜經』成立以前の犁耕圖および文獻史料を検討してみると、曲轅の出現はそれより遙かに古い。また圖版13の敦煌莫高窟壁畫中の犁耕圖に見られるように、盛唐時代の完全な曲轅犁の圖像が現在まで傳わっている。ただしこのタイプの犁が當地方で主流だったとは思われない。けれども『耒耜經』撰述以前の曲轅犁成立を明示もしくは暗示する資料は、華北に存在して江南には無い。わずかに残された資料で結論を導くのは危険であるが、すでに古くより長江流域の水田地帯

に定着した乾地農法用の直轆轤型長床犁に、唐代初期に北方で新たに改良普及をみた曲轆轤の技術が江南地方に傳播し、『耒耜經』に言及されている江東の曲轆轤が誕生したのではあるまいか。

『耒耜經』から導き出される曲轆轤は現在の曲轆轤に比べて寸法が大きすぎる嫌いがある。だが長さ三尺の犁鑿に言及しているから、たぶん一頭の輓畜に牽引させたものと考えられる。熊代幸雄氏の見解によれば、中國の曲轆轤の最大の特徴は、(一) 曲轆を採用すると同時に繫駕具の改良を達成した搖動犁であること、(二) 撥土効果を著しく高める曲面鑿を早期に採用したこと、の二點に要約できるとしている。そしてさらに犁研究の第一人者レーザー⁽⁵¹⁾ (Paul Lezer) の説を紹介して、ヨーロッパでは十八世紀に極東からこの技術が導入されて農業改革が開始されたと述べている。曲轆犁が世界の耕犁史の上で果たした役割は、まことに大きかったのである。

五　　む　　す　　び

中國農業技術發達史上、曲轆犁の出現は特筆すべき出来事であった。このタイプの犁が東アジア、ことに日本に與えた影響は大きい。また十七—十八世紀に華僑がこの犁を東南アジアに導入したことも判明している。⁽⁵²⁾ しかしながら中國古代の耕犁史を跡づけるのは容易なことではない。前述の假説を検證するには耕地制度の變遷、中國に現存もしくは現在も使用されている傳統的な犁と關連農具の網羅的な調査、および出土した犁先や犁鏵などの分析が必要であろう。わが國では天野元之助氏がこの方面のことを精力的に進めてくれたが、氏の逝去後さほど研究が進展したとは思えない。中國でも北京の農業博物館を中心にして多くの中國在來犁の収集に努めているが、中國内での情報交換が不十分なせい、また中國在來犁分布圖は完成していない。私は曲轆犁の問題を主として圖像資料から分析したが、今後は農業經濟史・民族學・民具學等の方面から幅廣く検討する必要がある。

註

- (1) 北田秀人「九世紀江南の陸龜蒙の莊園」、『日野開三郎博士頌壽記念論文集』中國社會・制度・文化史の諸問題』中國書店、一九八七年。また大澤正昭氏もトーマス・ティロ氏(Thomas Thilo)の『耒耜經』研究「Die Schrift vom Pflug (Leisjing) und das Verhältnis ihres Verfassers Lu Guimeng zur Landwirtschaft, "ALTORIENTALISCHE FORSCHUNGEN," VII, 1980, Berlin. を紹介しながら、陸龜蒙の莊園經營の舞臺となる江南の稻作經營を考察している(「唐代江南の水稻作と經營」、中國史研究會編『中國史像の再構成—國家と農民—』文理閣、一九八三年)。陸龜蒙の傳記史料については、小川環樹編『唐代の詩人—その傳記—』(大修館書店、一九七五年)の中島長文氏執筆陸龜蒙傳の條を参照のこと。
- (2) 王毓瑚『中國農學書錄』農業出版社、北京、一九七九年、五〇—五一頁。天野元之助『中國古農書考』龍溪書舍、一九七五年、五四頁。いずれも『四庫全書總目提要』の「唐・宋の藝文志、皆載せず。陳振孫の書錄解題に始めて一條を出してより、意うに宋末に乃ち別に行なわる」という記事に依據しているが、現行の『直齋書錄解題』には『耒耜經』は著録されていないばかりでなく、關連記事の掲載はない。あるいは元朝時代以降に單獨に流布するようになったのかもしれない。
- (3) 天野元之助『中國農業史研究(增補版)』御茶の水書房、一九八一年、七六七—七二頁。
- (4) 註(2)(3)前掲天野氏著書、および宋兆麟「唐代曲轅犁研究」、『中國歷史博物館館刊』總第一期、一九七九年、閻文儒・閻萬石「唐陸龜蒙《耒耜經》注釋」、『中國歷史博物館館刊』總第二期、一九八〇年。
- (5) この點については楊榮桊「曲轅犁新探」、『農業考古』一九八八年第二期を参照。
- (6) 傳存および出土の唐代の一尺物差は二九・三—三一cm。邱隆・他編著、山田慶兒・淺原達郎譯『中國古代度量衡圖集』みすず書房、一九八五年、三六頁以下。
- (7) 註(5)前掲楊氏論文。
- (8) 萬國鼎「唐尺考」、中國農業科學院・南京農學院中國農業遺產研究室編輯『農史研究集刊』第一冊、科學出版社、一九五九年。
- (9) 諸「耕織圖」中の犁耕圖については、拙稿「中國農書「耕織圖」の流傳とその影響について」、『東海大學紀要(文學部)』第四六輯、一九八六年を参照。
- (10) 早期の發掘報告に甘肅省文物委員會「酒泉下河清第一號墓和第十八號墓發掘簡報」、『文物』一九五九年第一〇期がある。
- (11) 文物編輯委員會編『文物考古工作三十年』文物出版社、北京、一九七九年、一四七—一四八頁(關野雄監譯『中國考古學三十年』平凡社、一九八一年、一四八頁)。
- (12) 陳昌遠「關於嘉峪關魏晉墓室壁畫的幾箇問題」、『河南文博通訊』一九八〇年第一期。

年、七八頁以下)の中でキシル千佛洞の壁畫畫家 Miradatta の名を紹介している。タールム盆地内のインド・アリア系文化の在り方については、松田壽男『アジアの歴史』日本放送出版協會一九七一年、一二七頁以下を参照。

- (27) 遼寧省博物館文物隊・他「朝陽袁臺子東晉壁畫墓」『文物』一九八四年第六期、圖版陸一より描き起こす。

- (28) 前掲報告書。

- (29) 註(3)前掲天野氏著書七五一―五二頁、および註(20)前掲同氏論文四一一頁。

- (30) 現在この模型は廣東省博物館に展示されている。圖版は一九八七年に筆者が撮影したものからの描き起こし。

- (31) 詳しくは陳文華「漢代長江流域的水稻栽培和有關農具的成就」『農業考古』一九八七年第一期(邦譯が『中國の稻作起源』六興出版、一九八九年に收められている)を参照のこと。

- (32) 徐恒彬「簡談廣東連縣出土的西晉犁田耙田模型」『文物』一九七六年第三期。

- (33) 圖版は李乃賢「淺談廣西倒水出土的耙田模型」『農業考古』一九八二年第二期所收の寫真より描き起こす。ただし原模型は破損がひどく人物の一體は復原されたもの。發掘簡報の廣西梧州市博物館「廣西蒼梧倒水南朝墓」『文物』一九八一年第一二期では犁田模型と推定。連縣の例に倣えば犁田耙田模型であつたかもしれない。

- (34) 『漢唐壁畫』外文出版社、北京、一九七四年、圖版五九の犁地より描き起こす。

- (35) 李壽墓壁畫の概要については、陝西省博物館・文管會「唐李壽墓發掘簡報」『文物』一九七四年第九期を参照。

- (36) 陝西省博物館・文管會「唐李壽墓壁畫試探」『文物』一九七四年第九期。

- (37) 原宗子「いわゆる「代田法」の記載をめぐる諸解釋について」『史學雜誌』第八五編第一一號。

- (38) 陳文華「試論我國傳統農業工具的歷史地位」『農業考古』一九八四年第一期。

- (39) 金毓黻「從榆林窟壁畫耕作圖談到唐代寺院經濟」『考古學報』一九五七年第二期、王靜如「敦煌莫高窟和安西榆林窟中的西夏壁畫」『文物』一九八〇年第九期、王進玉「敦煌壁畫中農作圖實地調查」『農業考古』一九八五年第二期。

- (40) この圖は吳楓・張亮采主編『中國古代農業技術簡史』遼寧人民出版社、瀋陽、一九七九年、二三八頁の插圖より轉載。なおこの著書は上海の胡道靜先生より惠贈を受けた。

- (41) 家永泰光「東南アジアを中心とした主要犁型の形成と分化―インド犁・中國犁・鈎轅犁の交叉―」『アジア經濟』第一〇卷第九號、一九六九年、四四頁の第一三圖を参照のこと。また註(25)前掲ヴェルト氏著書(三七〇頁地圖)によれば、二重軛は主としてヨーロッパ・西アジア・インド・東南アジアに分布しており、この敦煌壁畫は東トルキスタンの東端の事例となる。

- (42) 應地利明「犁の承譜と稻作」『稻のアジア史―アジア稻作文化の生態基盤―』小學館、一九八七年、一九五頁。

- (43) 河野通明「繪因果經」牛耕圖の再檢討」『ヒストリア』

第一一七號、一九八七年、七七頁所載の原本寫眞より描き起す。

(44) 前掲河野氏論文。

(45) 註(3)前掲天野氏著書七七一頁。

(46) 李霖燦『南詔大理國新資料的綜合研究』國立故宮博物院臺北、一九八二年、一二二頁の寫眞より描き起す。

(47) 前掲李氏著書。アメリカのチャピン女史 (Helen B. Chapin) はその論文 'Yunnanese Images of Avalokitesvara, *HJAS*, Vol. 8, 1944-45, p. 57-77' の畫卷を十一—十三世紀の臨模と推定している。

(48) 李昆聲「雲南牛耕的起源」『考古』一九八〇年第三期。

(49) 『新唐書』南詔傳には「犁田には一牛三夫を以てし、前挽、中壓、後驅す」とあるが、向達氏は「一牛三夫は、二牛三夫の誤りであらうとしている(向達校注『蠻書校注』中華書局、北京、一九六二年、一七一—七二頁)。

(50) 上山春平・渡部忠世編『稻作文化—照葉樹林文化の展開—』中央公論社、中公新書七五二、一九八五年、二二二頁。

(51) 熊代幸雄・小島麗逸編『中國農法の展開』アジア經濟研究所、一九七七年、第一章乾地農法における精耕細作の基礎—その世界史的意義—。

(52) F. Bray, 'The Evolution of the Mouldboard Plough in China', 'Tools & Tillage', Vol. III: 4, 1979, Copenhagen.

〔補記〕本稿を書き終えてから、圖版9・10に示した犁田耙田模型と同じタイプの模型(高さ9 cm×縦19・5 cm×横15 cm)が廣東省韶關市の西晉墓(大康七年〔二八六〕)から出土したことを知った。この模型には漏斗狀の灌排水調整用具の具合を見ている人物像まで附されている(廣東省博物館・香港中文大學文學部編『廣東出土晉至唐文物』香港、一九八五年、一〇八頁、圖2)。また圖版14・15・16に示したタイプの犁は、近年においても甘肅省の天水・敦煌および新疆省で使用されていることが調査によって明らかにされている(潘鴻聲「解放前長江黃河兩流域十二省區使用的農具」『農史研究集刊』第二冊、科學出版社、北京、一九六〇年)。

Later Han administration, which was the successor to Wang Mang's political power. Second, it was based on the historical material of the father and son pair of Liu Xiang and Liu Xin.

LU GUIMENG'S TANG PERIOD *LEISI JING* AND THE DEVELOPMENT OF THE CURVED-BEAM PLOUGH

WATABE Takeshi

During the closing years of the Tang dynasty, a book titled *Leisi Jing* 耒耜經 was written by Lu Guimeng 陸龜蒙, who was originally from the Suzhou region 蘇州. This book, in which are recorded the construction details for the curved-beam plough, is an historically important record of agricultural technology.

The curved-beam plough is one type of traditional Chinese square-framed plough. This plough's most significant features were the curved beam and the curved metal mould-board. This type of plough was not limited to East Asia but spread to South-East Asia and Europe, and had a significant effect on agricultural reform in those regions. According to traditional theories, this plough is thought to have its origins in the lower reaches of the Yangtze River. However, after examining wall paintings and articles buried with the dead, which are related to farming during the period from the Wei Jin era 魏晉 through to the Tang era 唐, it is not possible to say that the above mentioned theories are necessarily correct. Rather, it is possible to conclude that an improvement in the plough developed in the northern regions non-paddy farming belt during the early Tang period. This improved design was introduced into the southern regions paddy belt, where the curved metal mould-board was created.